Fate/Holy Grail War of Enkido

案道名津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／Ｈｏｌｙ　Ｇｒａｉｌ　Ｗａｒ　ｏｆ　Ｅｎｋｉｄｏ

【Ｎコード】
Ｎ０４０５Ｚ

【作者名】
案道名津

【あらすじ】
Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ

第四次聖杯戦争。

ウェイバー・ベルベットは魔術師を見返すために、聖杯戦争への参加を決める。征服王を召喚するはずだった彼だが、運命の歯車は狂い、彼が召喚したのは――簡素な服装に、男とも女とも取れる淡い緑色の長髪をした、中性的な風貌の人物だった。

タイトル変更しました。

元：Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ　人類最古の英雄王唯一の友

はじめに

おひさしぶりです。
といっても、知ってる人は少ないでしょうが……
今年の夏まで恋姫小説を書いていたのですが、自分の未熟さにうんざりし、見つめなおしていました。
恋姫のほうはプロット作成段階で全然進みません。
ということで一年ほど前に考えた『Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ』の二次創作を練習として投稿し始めることにしました。
投稿に至った理由ですが、Ｚｅｒｏのアニメが始まったことです。
忙しくてまだ三話しか見てないのですが、あまりのクオリティに驚いて、久々にはまりました。
そして思い出しました。あ、そういえば前に書いたやつあったなと。

この作品は初の三人称を練習しているので、
変な文章があるとおもいますが、ま、下手だなと思いながら見てください　（笑）

そしてやはり難しい型月作品。
ご都合主義、独自解釈があります。
サーヴァントもライダーが征服王イスカンダルではありません。
ウェイバーとイスカンダルが好きな方は見ないことをお勧めします。
サーヴァントはオリジナル設定にＦａｔｅ／ｓｔｒａｎｇｅ　ｆａｋｅの設定を混ぜ合わせています。
ライダーが結構な最強キャラになりますので、チートが好きな人も見ないことをお勧めします。
タイトルの最古の王とはあまり関わらない可能性があります。
また、多くのキャラがキャラ崩壊、え、これ誰ｗという状況になっている可能性があるので、御覧になる際はそこの部分をご了承くだ

さい。あくまで自分の思ったように執筆します。

投稿に関してですが、日常生活が忙しいので、
二週間に一回、最悪一月に一回のペースになるかと思います。

ACT01

ウェイバー・ベルベットの才能は誰にも理解されなかった。
魔術師として、さして名のある家門の出自でもなく、優秀な師に恵まれたわけでもない少年が、
なかば独学で修行を重ね、ついには全世界の魔術師を束ねる魔術協会の総本部、
通称を『時計塔』の名で知られるロンドンの最高学府に招聘されるまでに到ったという偉業を、
ウェイバーは何人たりとも及ばぬ栄光であると信じて疑わなかったし、
そんな自分の才能を人一倍に誇っていた。
しかし『時計台』での評価はひどいものだった。別に彼の成績が悪いわけではない。
それはすべて魔術師としての歴史にかかわるのだ。魔術師をして最も価値のある財産である魔術回路と魔術刻印。
彼の家系はまだ三代しか積み重ねていない。それは彼もわかっている。
だからこそ彼は魔術師としての今までの価値観を否定し、努力することにより得たものを認める論文を作った。
彼は努力し、自身に才能が付いたと自信を持っていた。
しかし、それは周囲から見たら粗末なものだった。
そうとは知らず、彼は論文を名門であるアーチボルト家の嫡男、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトに提出した。

そしてほどなくして彼の期待は打ち破られた。
ケイネスは、ウェイバーの論文をあっさりと破り捨て、ウェイバーに注意をしたのである。
一般的に見ればケイネスの行動、言動はほめられたものではないだ

ろう。
しかし、時計塔は一般的ではなかった。
権力、財力、魔術師としての力すべてがウェイバーの上を行くケイネスは非難されることなどありえないのだ。

ウェイバーはケイネスのその行為、その態度を許すことはできなかった。
そしていつか魔術協会に自分が正しいことを認めさせてやると誓った。
が、意気込んだは良いが、肝心の手段が一向に思い浮かばなかった。
しかし、ある日であるケイネスがとある儀式に参加することを知る。
――聖杯戦争。
参加者である七人の魔術師はマスターが各々一騎の英霊を己のサーヴァントとして召喚し、
あらゆる願いと望みを叶える願望機である聖杯を得るため、七組のマスターとサーヴァントが最後の一組となるまで戦い抜き、殺し合う。
聖杯戦争の詳細を知ったウェイバーはこの儀式を、千載一遇の好機だと考える。
そして時を置かずにウェイバーにとって幸運なことが起こった。
ケイネスに届くはずだった英霊召喚のための触媒をウェイバーが手に入れた。
触媒は偉大な英雄が生前用いていた外套の切れ端であった。この触媒で召喚される英霊は一人しかいない。
征服王イスカンダルである。
ウェイバーは歓喜していた。これが、この英霊がサーヴァントとなれば、優勝も夢ではないと。
しかし、事はそうも簡単にいかなかったのである。

「あぁ……ちくしょうっ、なんでこうなるんだよっ！」

ウェイバーはひたすら地面に拳を殴りつけていた。
聖杯戦争に参加を決意したウェイバーは日本の冬木市に入り、令呪を手に入れた。
そして今日、最強のサーヴァントを召喚するべく、冬木市深山町の某雑木林の奥で、英霊召喚を行おうとしていた。
もちろん、そこには触媒となる外套の切れ端を持ってきていた。
しかし、風が強かったのが不幸となってしまった。
質量の軽い外套は風に飛ばされてしまったのだ。それを最初は追ったものの、
追っているうちに見失ってしまい、現在に至る。
とりあえず、元いた場所に戻ってきたが、触媒はなく、鶏三羽の血で描かれた魔法陣だけが寂しく存在していた。

この時、すでにウェイバー・ベルベットには怒りはなく絶望と恐怖が襲っていた。
英霊を召喚する触媒をあっさりと自分のミスで失った現状、この状況で聖杯戦争を勝ち抜くのは困難である。
すでにマスターとして令呪を持った以上、他の参加者に狙われることとなる。
ウェイバーの人生においてケイネスに馬鹿にされた以上に最悪の状態になっていた。

「なんでっ……こんな……僕がなにをしたっていうんだっ！、くっそぉ！！」

涙を流す。
地面を殴りつけていた拳からはうっすらと血が出ている。
拳から伝わる痛みで次第に落ち着いたが、絶望的な状況が変わったわけではない。
ウェイバーとしてとれる選択は二つ。逃げるか英霊を召喚するか。
しかし、逃げることは困難だ。すでにマスターとしてばれている可能性は大いにあるし、ケイネスの触媒を盗んだことで恨まれているはずだ。
ここで逃げるという選択肢は取れない。
それならば、ひとつしかない。しかし、それはウェイバーにとって吉と出るか凶と出るか。

「死にたくない。……僕は……いや、僕ならできる」

彼は決意を決めた。
彼を後押ししたのはプライドだろう。この召喚が成功し、もし聖杯戦争で生き残れば、自分を見下した奴らを見返すことが出来る。
だから選んだ。それは彼に残った最後の意地だった。

「やってやるよ……」

ウェイバーはこの絶望的な状況において、戦う道を選択した。

「閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。閉じよ（満たせ）。繰り返すつどに五度、ただ、満たされる刻を破却する――」

詠唱をする中、ウェイバーは自身を信じる。
必ずや、ここで召喚するものが他者を圧倒する英霊であるように。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ――」

最強のサーヴァント。それこそ、征服王イスカンダルを凌駕する存在を！

「――汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よっ！！」

そして呪文の詠唱が終わると、魔方陣から暴風が起こる。陣の文様が紅く輝く。
その暴風に耐えられず、ウェイバーは後方へと吹っ飛ばされた。
だけど、目線は魔法陣から外さない。自身が呼んだ最強のサーヴァントを確認するために。

「――問おう。君がマスターかな？」

ウェイバーの眼前には、簡素な服装に、男とも女とも取れる淡い緑色の長髪をした、中性的で
柔和な風貌で、その精緻さは人間というより人形のように思わせる
人物がまたも中性的な声で言葉をかけたきた。

ＡＣＴ０１（後書き）

短い…そして早速ご都合主義。
触媒無くすとかありえないでしょ……
ま、自分の想像力なんてこんなもんですよ（笑）

それとＺｅｒｏのキャラで好きなのはイスカンダル・ウェイバーちゃん。
自分でコンビ消しといてなんですが、このコンビ本当に好きです。
あとはケイネスですね。彼はなんだかんだ好きです。
Ｓｔａｙｎｉｇｈｔだと私はイリヤと桜とキャスターが好きです。
書くならこの３人ヒロインで決定

Ｐ．Ｓ．

雁夜おじさん頑張ってね……

ACT02

ウェイバーは結果として触媒なしでサーヴァントの召喚に成功した。
暴風で吹き飛ばされる中、確かにこの世のものとは思えない気配。
英霊の気配をかんじた。
そして結果見事、英霊を召喚した。それはウェイバーの自信をより強めたのだった。
成功したことによる高揚感で触媒を失ったことなどの焦り、絶望感は薄れていた。
しかし、サーヴァントの姿は彼を裏切った。
サーヴァントは男とも女とも取れる淡い緑色の長髪をした、中性的な顔立ち。声も中性的で、身長も女性にしては高いが
自分より大きいにしても男性としては低い部類に入る身長なのだ。
もっと自身の召喚する英霊は存在感が大きく、頼れる存在というものが、彼が期待していた英霊だった。
おそらく、征服王を召喚するつもりだった彼はその存在が大きいと心のどこかで思っていたこともあるのだろう。
ウェイバーが唖然としていると、サーヴァントが歩み寄ってきて顔を覗いた。
その瞬間彼の顔とサーヴァントの顔はかなり近づいた。

「わ、うわぁっ」

ウェイバーは奇麗な顔が近くに来て驚いて情けない声を出して顔を真っ赤にして倒れてこんでしまった。

「うん？ごめん。驚かしちゃった？…ところで、君が僕のマスターでいいのかな？」

「そ――そう！　ぼぼぼボクが、いやワタシが！
オマエのマスターの、ウ、ウェイバー・ベルベットです！
いや、なのだッ！　マスターなんだってばッ！！」

何かもう色々な意味で駄目で、マスターとしての威厳のど皆無であるが
ともかくウェイバーは精一杯の虚勢を張って目の前のサーヴァントに対抗した。
それを見て、サーヴァントは微笑む。

「ふふっじゃあ、契約完了だね。サーヴァントライダー。
僕の力でマスターウェイバー・ベルベットを守ってあげよう」

その微笑みにウェイバーはドキッとする。
そこでウェイバーは気になっていたことを聞いてみることにした。

「な、なぁ。ところで、ライダーは、女なのか？男なのか？」

大変失礼な質問になってしまうが、ウェイバーにとっては大切なことなので、聞いておくことにした。

「僕？男だけど…女でもある、かな」

なんとも不可解な回答である。
男だけど、女…ウェイバーが導き出した答えは、オカマである。
しかし、オカマの英霊なんて聞いたことがない。
というか考えたくもない。
目の前のサーヴァントが女性で実は男性でしたって言われたら、
それはまぁ仕方ない気もするのだが。
とりあえず、ウェイバーにはこのサーヴァントの真名が皆目見当もつかなかった。

「ラ、ライダーお前の真名は？」

「ちょっとまって。…うん。周りには誰もいない。…僕の真名はエルキドゥ」

真名を聞いたときウェイバーは驚きを通り越して唖然とした。
エルキドゥ。最古の英雄王の唯一の親友。
英霊というよりは神霊寄りな存在。
なるほど、女神の泥から出来たかのものなら女、男それぞれであるともいえるかもしれない。
ともかく自分は最高のサーヴァントを呼び出すことに成功した。
そのことにウェイバーは喜びを隠しきれず、顔をにやけさせた。
ウェイバーはライダーのステータスを見る。

【クラス】ライダー
【マスター】ウェイバー・ベルベット
【真名】エルキドゥ
【性別】不明・男
【身長・体重】１６７ｃｍ　５４ｋｇ
【属性】混沌・善

【筋力】Ｂ　【魔力】Ｂ
【耐久】Ｃ　【幸運】Ｄ
【敏捷】Ａ　【宝具】－

【クラス別能力】
対魔力：Ｂ
騎乗：Ａ＋

【保有スキル】
気配感知：Ａ＋
勇猛：Ａ
単独行動：Ａ＋
怪力：Ｂ

言語理解：B

神性：C

驚くのがこのスキルの量である。
魔術師として血の浅い彼には嬉しいのが単独行動A＋のスキル。
とにかくこれは間違いなく最高である。しかし、宝具のランクがわからないのは不可解である。
まさか、宝具を持っていないなんてあるまい。
それを聞こうとすると、

「さて、真名も明かしたことだしそろそろマスターの拠点へ移ろう。ここじゃ寒いしね」

ライダーがウェイバーに提案してきた。

「わかった。あ、でも霊体化しといてくれよ」

「わかったよ」

そう言ってライダーは姿を消した。
宝具のことはまた後で聞こうと思う。

ＡＣＴ０２（後書き）

ライダーの正体はエルキドゥでしたー
といってもタグで気付いた人もいるかと思いますが。
エルキドゥは実際の伝承とは違い、Ｆａｔｅ／ｓｔｒａｎｇｅ　ｆａｋｅをモデルとします。ステータスは自分の勝手な想像です。

それと短いのは本当はＡＣＴ０１と０２はひとつだったんですよね。
でも、見直ししてたらいつの間にか分かれてました（笑）
というわけでＡＣＴ０３は少しは長いです。

Ｐ．Ｓ．

サーヴァントの設定はＡＣＴ０３を投稿してからにします。

ACT03

ウェイバーとライダーはウェイバーの拠点である民家へやってきた。
ウェイバーとライダーは民家に戻った後、今後について話そうとしたのだが、
召喚のときの魔力消費が思ったよりも身体に応えたウェイバーは部屋に入るなり倒れるように寝てしまった。
困ったライダーはとりあえずマスターであるウェイバーをしっかりとベッドの上に寝かせ、ウェイバーの寝るベッドの隣に座ることにした。

次の日ウェイバーは起きると自分がいつの間にか眠ってしまったことに気づいた。
しかも、今自分はベッドに寝ているが、しっかりと寝るためにベッドに入った覚えはなかった。
おそらくライダーがやってくれてたのだろうと思い、上半身をベッドから起こしライダーを呼ぶことにした。

「おい、ライダー」

……静寂。ウェイバーの言葉に反応するものはいない。
ライダーが近くにいないことがわかり、すぐに念話をつなぐ。

（おい、ライダー。どこだ？）

（”私”ですか？”私”は今マスターの家にいます）

家にいるといっているが近くにはその姿は見えない。魔力も感じられない。

（魔力が感じられないんだけど）

（あ、それは私が魔力封じのアミュレットを付けているからです）

なるほど、それなら合点がいく。
しかし、そんなものも持っていたのか。聞いていなかったウェイバーはむっとするが、
昨日自分が寝てしまったので、そこはぐっと我慢することにした。

（で、近くには見えないけど。家のどこにいるんだよ）

（”私”は、一階にいます。）

それを聞いて、ウェイバーは飛び起きて、部屋を出る。
今は朝だ。もちろん人間が通常おきる時間である。
それはどこの家もほとんどがそうだろう。
もちろんこの民家だって例外ではない。
そしてこの民家にはウェイバー以外の人物たちだって住んでいる。

それが問題なのだ。もし鉢合わせでもしたら、なんていえばいいか。また、得意ではない暗示をかけなおさなくてはと痛くなる頭を抑えながらリビングへと走った。

階段を下りれば、そこにはいつものこの民家の住人マッケンジー夫妻が朝食をとっていた。

「あら、ウェイバーちゃんおきたのね」

婦人のほうに話しかけられ、いつもどおりの落ち着いた対応に安堵する。
ライダーは一階にいるといっていたが、リビングにはいないようだ。
そう安堵したのだったが、次の婦人の言葉でそれは崩れ去った。

「ウェイバーちゃんもお年頃なのね。こんなお奇麗のお嬢さんを捕まえてくるんですもの」

「まったくだなマーサ」

そう嬉しそうに話す二人はウェイバーにとってすでに眼中になかった。
ウェイバーの視点はキッチンで料理をしている緑の髪をした美少女もとい美少年……ライダーに釘付けだったからだ。
最初唖然としていたウェイバーだったが、次第に意識を取り戻すと、

ライダーの元へ詰め寄った。

「らぁ～い～だぁ～」

それに料理に夢中になっていたライダーはようやくウェイバーの存在に気づき、
いや、おそらくはもっと先に気付いていたんだろうが、ウェイバーを見た。

「あ、マ…ウェイバーおはようございます。ウェイバーの朝ごはんもすぐにできますから、、顔を洗ってきてください」

「…あ、あぁ。わかったよ」

微笑んだライダーに見惚れ、普段からあるような会話をしたライダーに乗せられ、普通のように会話してしまったウェイバー。
洗面所へ向おうとして、違うことを思い出した。

「って、そうじゃない！！ライダーなにやってんだよ！？」

ウェイバーはようやく突っ込むことができた。

「なにって…朝食を作っていますよ？」

「そうじゃない！！…なんでサー…むぐっ」

ウェイバーがサーヴァントという言葉を発しようとしたときライダーの奇麗な手がウェイバーの口をふさいだ。
相手が男だとわかっていても突然のことに赤面してしまうウェイバーに、真剣な表情でライダーは念話をしてきた。

（その単語は一般人がいる前では言わないお約束です。ご安心ください。
お二人には悪いですが暗示をかけさせてもらいました。）

（お前、暗示使えるのか？）

（はい。今の状態の”私”なら暗示なんて簡単なことです。）

（ふ～ん。で、お前とはどういう設定なんだよ？）

（はい。”私”はマスターとは恋仲の設定で）

「…なんでそうなるんだよっ、！」

ウェイバーはライダーの回答を聞くとついつい声が出てしまった。顔は相変わらず赤いがさきほどよりも赤くなっている。

「どうしたの、ふたりとも」

「喧嘩はよくないぞウェイバー」

ウェイバーの大声にマッケンジー夫妻が心配して二人に視線を向ける。

「すいません。ウェイバーが”私”と離れたくないって駄々をこねて、少々声を荒げてしまっただけですので、ご心配なく」

「あらあら、ウェイバーちゃんはエルさんのことが大好きなのね」

「私も昔はマーサとラブラブだったからな。仕方ない。ウェイバーあまりエルさんを困らせるな」

「ふふっおじいさん。若い人たちに私たちは邪魔でしょうから、退散しましょ」

「そうだな。ウェイバーにエルさん。私たちは散歩にいってくるよ。…エルさんウェイバーを頼みました」

「はい。」

ライダーはマッケンジー夫妻に対して笑顔で言い放ち、それに対しマッケンジー夫妻も微笑ましいものを見たと笑顔になる。
マッケンジー夫妻が出て行ったのはラッキーだが誤解を解けていないことでその光景にますますウェイバーの怒りが顔にあらわになってくる。
ウェイバーは納得がいかなかったものの、このままでは埒が明かないし、夫妻が散歩に出るならその後ライダーに問いただすことにして渋々洗面所へ顔を洗いに向った。
マッケンジー夫妻が出て行ったことを確認すると、ウェイバーは朝食を作り終えてリビングのテーブルに座っていたライダーに朝一番と同じように詰め寄った。

「ライダー、言いたいことがいくつかある！」

「わかりましたけど、早く食べないと、朝食が冷めてしまいます。作ったものとしては温かいうちに食べて貰いたいのですが」

ライダーは詰め寄ったウェイバーにまったく動じることなく、朝食を食べてくれるよう促す。

ウェイバーより背が高いライダーだが、椅子に座っているのでウェイバーを見つめるような形になる。
ライダーの奇麗な顔が詰め寄ったウェイバーに向けられている。
ウェイバーはそれにまたも赤面してしまう。
しかし、今回ばかりはといいたいことを言うことにした。

「…そもそもな、お前がボクのこ、ここ恋人になる！？お前もボクも男だろっ！」

そうだ、ライダーはウェイバーの青年の心を擽る動作を今日の朝ずっとしてくる。
ひとつひとつの動作が妙に女性ぽい。だが、ライダーは男だ。これはわかっている。
だからこそウェイバーはますます困惑していたのだ。

「……？…”私”は女性ですが」

少し考え後首をかしげ、ライダーは何を言っているのかといった感じで自分を女性と言った。
もう少し冷静になって考え、昨日の会話を思い出せば、
ライダーの言っていることが理解できたのだろうが、この時のウェイバーには無理だった。

「馬鹿もやすみやすみいえよっ！…ふふんっボクを惑わそうとしても無駄だぞ？」

ウェイバーは怒ったかと思うと、すぐに踏ん反り返りえらそうに鼻を鳴らす。

「こうやれば…一目瞭然だぁ！！」

そしてウェイバーはライダーの胸を鷲づかみした。
そう鷲づかみしたのだ。男であるならば上にふたつの山はなく、下にものがついていること。
さすがに下のものを触るのは嫌なので、胸を触ったのだったが。

「…ぁ…」

「ほら、な…い…あれ、なんでこんな…柔らかいんだ？」

勢いよくもんでいた手が少し緩む。
ライダーは少し顔を赤らめて、艶やかな声を出していた。
そして……ウェイバーは、気付いてしまった。
そうだ、よく見れば胸があるのは服ごしにも少しわかった。
身体の線だって昨日会った時以上に細いし丸っこい。
背もウェイバーよりは高いにしても、少し縮んでいるようにも見える。
喋り方も昨日以上に物腰やららかな感じで。
そして一人称が”僕”なはずのライダーが”私”と言っていること

にいまさらになって気がついた。

「お前…本当に…お、女なのか？」

冷や汗をかいたウェイバーはライダーに恐る恐る聞く。
ライダーはウェイバーの質問にこくりと静かにうなづく。
それを聞いたウェイバーは手を離し

「う…うぁ…ご、ごめんなさぁいぃぃいいいい！！」

急に駆け出し、階段を上り部屋に駆け上がり、ベッドに入り込むと身体を布団で隠すように包まってしまった。
残ったライダーはというと、なんともいえない表情でマスターの奇行を見つめていたのだった。

ライダーはあれから布団から出てこないウェイバーはなんとか一回に降ろし、朝食をとった。
朝食をとる前にウェイバーはライダーに謝った。
ライダーは別に気にしていないといっていたが、
ウェイバーはやはりさきほど触ったライダーの胸を見る度に感触を思い出してしまい、
いちいち赤面していたが、時間がたつにつれて落ち着いてきていた。
そして朝食をとり終わり、ライダーは食器を洗い、ウェイバーはリビングでくつろいでいた。
ところでウェイバーがライダーに疑問をぶつけた。

「なぁ、ライダー」

「なんですか？」

ちょうどよく食器を洗い終わったのか、ライダーが身に付けていたエプロンを外しながらやってきた。
またエプロン姿もいいなどと思ってウェイバーは考えるのをやめた。

「今ライダーが女性なのはわかったんだけど、さっき言ってた『今の”私”なら暗示も簡単』ってどういうことだよ？」

これはウェイバーが疑問に思っていたことだ。
確かに昨日みたライダーのステータスの魔力はBでスキルには魔術Cというものまであったことから魔術を使えることは分かるのだが、いまいち納得がいかない。やはり”今”という単語が引っかかっていた。

「昨日も言ったように、私は男性でもあり女性でもあります。
それぞれの身体に構造を作り変えることが出来るのです。
そして現に私は昨日は男性、今は女性でいます。
……そして実はそれぞれの性別によりスキルもステータスも変わるのです。
男性の私は武術による戦闘が得意になり、女性の私は魔術が得意に

なります。
それこそ女性の私はキャスター並の大魔術もいくつかは行使することが可能です。
ただし、筋力などが低下してしまう弱点がありますが。
女性のほうの具合を見ていた所に、マッケンジー夫妻と遭遇してしまい、やむ終えず、
女性という形であくまで無理のないように暗示をかけさせてもらいました」

ウェイバーは最後のほうはあまり聞いていなかった。興奮をしていたのだ。なにか？
それは自分のサーヴァントはライダーのクラスに現界しながら、
大魔術を行使できる事実。
自力で召喚したサーヴァントは、
今まで自分を馬鹿にしてきた『時計塔』の人間たちを見返すことができる存在なのだ。
それに興奮せずにはいられなかった。

「…ところでマスター、あなたは聖杯に何を望みますか？」

そんなウェイバーにライダーが聖杯を手にほしい理由を聞いてきた。
聖杯戦争に参加するものは必ずしも何らかの願いを持っているものである。
それを願望器である聖杯で叶えるというのが常だが、ウェイバー・ベルベットは違った。
聖杯など必要ない。ほしいのはひとつだけだった。

「ボクは…ボクは聖杯なんていらない。……ボクが望むのはな、ひとえに正当な評価だけだ。
ボクの才能を認めなかった時計塔の連中に、考えを改めさせてやることだっ！！」

そうウェイバー・ベルベットが欲するのは正当な評価。
聖杯を手に入れることが出来ても、それを使用することは考えない。
ウェイバー・ベルベットが目標とするのは、聖杯戦争に勝ち残り、己の才能を認めさせることにあった。

「というわけだから、聖杯はお前にやるよっ」

ウェイバーの発言にライダーは驚いた。
己のマスターは聖杯はいらないといい、取った暁には聖杯をサーヴァントである自分に渡すというのだ。
驚かないはずがない。
ライダーはこの少年、ウェイバー・ベルベットについて少し理解できたような気がする。
そして彼に好感を持った。
先ほどまでは、ライダーとのことでうろたえたり、マスターの威厳が少しもないところを見て、今後が不安だったが、
少なくとも彼は努力している。ライダーは努力ということことが好きだ。
己に負けず、自分の意思をはっきり持っている者が好きだ。
だから改めて誓ったのだ。

「…マスター。私はあなたを見くびっていた。…改めて誓わせてもらいます。
必ずやあなたに勝利を。この身体、あなたに捧げましょう」

ライダーは膝をついて頭を垂れた。いきなりのことにウェイバーは対処できなかったが、
そんな己のマスターの姿を見てライダーは微笑んでいた。
これもウェイバーのいいところ…なのだ。

「で、でライダーは何を望むんだ？」

「私ですか？…特にはありません。使い道は手に入れたらということで」

ＡＣＴ０３（後書き）

皆様色々聞きたいこと、言いたいこと、突っ込みたいことがあるでしょう。
まず、なぜ女にしたか…
それは彼が女であるかもしれないという私の願いです（笑）
伝承的にはシャムハトと交わったとあることから男でしょうが、
そんなことは知ったことではない！
自分はエルキドゥは女でもあってほしい！
どっちも書きたいのでこういうことになりました。

次に女のエルキドゥは魔術が得意。
これは、女と男を比較させる際に何のメリットもない。
じゃあ、なんか考えよう。
魔術とかいいんじゃないか、という浅はかな考えからです。
エルキドゥが魔術使うとかこいつ何考えてんのとか思われるかもしれませんが、そこは皆様の寛大なお心でスルーしてくださると嬉しいです（笑）

基本こんな感じで無理な設定がこれからもいくつか出てきます。
ご注意ください。

あと宝具に関してはもう少しで公開にしますが、何もかもが中途半端。宝具の数が大変なことに（笑）
ギルガメッシュの【王の財宝】があるので多少多くてもいいような気もしているのですが……悩みどこです。

なので、ご意見があれば参考にさせていただくのでお願いします。

P．S．

次の投稿は予定を変更してＡＣＴ０４
エルキドゥの設定はＡＣＴ０４が終わったらにします。

ACT04（前書き）

金ぴか好き注意報。
原作の金ぴか好きな人は注意してください。

ACT04

「アサシンが――殺られた？」

いきなりの結末に拍子抜けしながら、ウェイバー・ベルベットは目を開けた。

今までウェイバーが見ていたのは、放った使い魔が見ていたものだ。使い魔は各方面に放っている。そのうちのひとつ御三家の一角遠坂邸を見張らせていたものだった。

遠坂邸に侵入したアサシンは、庭にて遠坂のサーヴァントに討ち取られたのだった。

そのアサシンを倒したサーヴァントは異様であった。なにが異様か。

それはサーヴァントが放った武器。つまり宝具である。

アサシンに放たれたことから、そのサーヴァントがアーチャーである可能性が高いが、問題はそこではない。

アサシンに放たれた数だ。

一個や二個ではない。数十個という様々な武器がアサシンに放たれたのだ。

しかも、そのひとつひとつの武器の帯びていた魔力。

それはサーヴァントが保持する宝具と同じ。

そうつまりアーチャーと思われるサーヴァントは少なくとも数十個の宝具を持っているという事がわかる。

これは異質なことだ。普通サーヴァントが持つ宝具は1個。

特殊な宝具、武器としての宝具をたまにいくつか持ち合わせているサーヴァントもいるが、

それを考えてもあのアーチャーは異質であり、最強であるといえる。

あの圧倒的な力。威圧感。ウェイバーは恐れを感じずにはいられな

い。
そういえば、ライダーの宝具についてまだ聞いてなかったことを思い出したので聞いてみようとしたのだが、
ライダーは黙って目を閉じているだけ。
今まで同じ光景を見ていたはずのライダーはとくにあわてる様子もない。

「ライダー？」

「……」

ウェイバーが話しかけても答える仕草はしない。
ウェイバーは自身のサーヴァントが自分を無視したことにイラつき、少々声を荒げた。

「ライダー、ボクを無視するなっ！」

ようやく聞こえたのか、ライダーはウェイバーを見た。

「あ…ごめんなさい」

ライダーは素直に謝る。

「どうしたんだよ。なんか考え事か？」

「…先ほどのことで気になったことがありまして」

ライダーが言っているのは十中八九アサシンが敗退したことだろう。
だが、なにを気になったのかがウェイバーにはひとつしか思い浮かばない。

「あのサーヴァントの真名か？」

ウェイバーが思いついたことはこれだった。
真名がわかれば敵より有利になれる。ただ、あの数の宝具だ。
どの伝承の英雄か調べるのは無理そうだ。だからこそあの光景だけでは真名など判断できないわけだ。
だが、次にライダーが言った言葉ですべてがある意味終わった。

「…違いますよ。それにあの者の真名なら分かっていますので」

「……今、なんていった？」

ウェイバーは混乱する。わかっている？
いったいどこで情報を仕入れたのかはわからないが、奴の真名がわ

かっているという。
ウェイバーは聞き返せずにはいられなかった。

「…言うまでもないですが宝具とは英霊が生前に築き上げた伝説の象徴。
伝説を形にした「物質化した奇跡」です。マスターが混乱するのも無理はないと思いますが、あれほどの宝具を所有する英霊など普通居ないでしょう。
しかし、もし生前に世界の財を集めたものがいたらどうでしょうか？その伝説が宝具というひと括りとしたらどうでしょう」

生前集めた財？それがあのサーヴァントの宝具？
そんな英雄いない。……いや、いる。有名過ぎるがゆえに省いていた。
最初は神霊に近い英雄なのだから現界するわけないと思ったが、現に自分のサーヴァントは神霊寄りのサーヴァントだ。
ならありえない話ではない。

「お気づきになられたようですね。生前にそれだけのことをした者。…私の唯一の友人、ウルクの英雄王ギルガメッシュ。…まぁ、あの宝具を見て
この真名にたどり着くものはそうそういないでしょう。私は元々気配で気付いていたようなものですし」

「それ言うのが遅くないか！？」

ライダーが気配で分かっていたというなら、
今回の出来事が起こる前に他のサーヴァントの情報がわかっていたはず。
つまりウェイバーに隠し事をしていたということになるわけだ。

「申し訳ありません。私も気付いたのは少し前。報告する前に今回の事が起こったので」

……それなら仕方ない。

「と、ところでライダーは他に気になっていることがあるって事だよな？」

「…はい。私が気になっているのは今回の出来事そのもの。
アサシンが侵入し、そして我々が『アサシンが葬られるのを見た。』ということです。」

ウェイバーはそのライダーが言ったことが理解できない。

「よく考えてもみてください。相手はこの聖杯戦争における御三家の一角遠坂。
元々内情を簡単に知れる場所ではないはずです。」

そうだ、ライダーの言うとおりだ。
遠坂の拠点だ。そう易々とその中が覗けるなど普通に考えておかしい。

「出来すぎてるとは思いませんか？あの場には他の参加者の使い魔なども居ました。
その者たちに見せ付ける様に、アサシンはアーチャーに敗北したのです。」

「…つまり、遠坂はその場をわざと見せて自身が最強のサーヴァントを駒にしていることを見せびらかしたってわけか？」

プライドの高い魔術師がやりそうだ。
おそらくアサシンのマスターとアーチャーのマスターが組んで、この茶番をしたのだろう。
アサシンが敗北した時点でアサシンのマスターは負けが確定しただろう。
おそらくアーチャーのマスターからなんらかの報酬を得たりしているのだろう。

「……しかし、それではおかしいと思いませんか？
いくらアサシンのマスターと遠坂が組んでいようとも願望器を手に入れる機会をそうみすみすと逃すはずがありません。
…私が思うに、アサシン、アーチャー両方の陣営が脱落しないようにする。…そう考えるのもひとつの証拠からなのですが」

「どういうことだ？」

「私には気配感知というスキルがあるのは知っていますよね？
私のランクならば気配遮断を持っているサーヴァントですら気配を見破ることが出来ます。
それには流石に集中力を使いますし、遠距離の確認は出来ませんが…と私のスキルの説明はここまでにしましょう。
つまり言いたいことはアサシンがまだいるということです。」

「……なに言ってるんだよライダー。アサシンはさっき殺られただろ。お前もみてたじゃんっ」

ライダーが言った理解しがたい発言にウェイバーは先ほど見た光景を思い出す。
アサシンは確かに殺られた。ウェイバーの発言にライダーも頷いている。
つまり、それは確かだ。ならライダーが言っていることはやはりおかしいことだ。

「そう。確かにアサシンは殺られました。
……ですがおかしいことに少なくともアサシンの気配が…二体分感じられます。」

「…はぁ？」

混乱が大きくなった。
ライダーによるとアサシンが二体。
アサシンが二体という状況が理解できない。

「それにどちらのアサシンの気配も多少の差は感じられようとも同一体に間違いありません。
さきほど殺られたアサシンとも同じでしょう。
ここから考えられることはアサシンの宝具かスキルですね。
分身を可能とする宝具かスキルと考えられます。」

なるほど、それなら合点がいく。
つまり、アサシンは敗退させたと見せかけて、実はまだ生きている。
だが、他の参加者はあの光景を見せられアサシンがいないものだと思っている。
おそらくアサシンとアーチャーのマスターはそれを狙っているのだ。
裏でアサシンを動かせるつもりだろう。
しかしだ。ここまで考えつくなど、到底不可能。
この事実に気付いている者が何人いるか。
いても自分たちのように核心に迫っているものはほとんどいないだろう。
ウェイバーはあらためてライダーのすごさを実感した。

「なぁ、ライダー。今近くにアサシンはいるのか？」

「二体のうち一番近いのが5百メートルの地点に一体ですね。
こちらは私とマスターそれぞれに私の身体の一部で魔力を隠蔽して
いるため見つかることはないと思いますが……排除しますか？」

「いいよ別に。もし下手して他のアサシンに見つかれば、
ボクたちがアサシンが生きているのを知っているってばれるんだか
ら、こちらを狙ってくる可能性もある。
ところでこのアミュレットがお前の身体の一部ってどういうことだ
よ？」

ウェイバーは自身の腕に付けられている今朝方ライダーから貰った
アミュレットを見ながらライダーに聞いた。

「……私が渡したアミュレットありますよね？あれは私の身体の一
部から作られているものです。
どうやったのかを説明します。私の宝具のひとつに【女神が与えし
泥の肉体】というのがあって
それは私の身体を作っている元の泥のことなのですが、これは私が
思うように形を変えることが出来るようです。
流石に武器などの質量が大きいものは無理なのですが、アミュレッ
ト程度なら問題ありません。
そしてこのアミュレットがマスターの魔力を外側から覆いかぶすよ
うに発動しているので、
マスターの魔力も私の魔力も気付かれることはまずないでしょう。

ちなみにこのアミュレットの泥の魔力は私の身体を外れた時点ですでに魔力として探知できないようになっているので、心配には及びません」

思わぬ時にライダーの宝具を知った。
つまりライダーは身体自体が宝具ということだろう。
……それってすごくないか。

「…ということはライダーは自分の身体を武器にして戦えるのか？」

「一応はそういうことですね。ただ私は”人間”なので、自分の身体を武器にして戦うようなことは出来ません。
そこらにある刃物なら防げますが、宝具と渡り合ったりしたら、私の身体は一瞬で砕け散ることでしょう」

戦いには向かないということだ。
しかしライダーの言い方からして宝具はひとつではないだろう。
それにライダーがライダーたる所以がウェイバーには思いつかない。
これも聞いておく必要がある。

「ところでライダーはなんでライダーのクラスなんだ？バーサーカ

ーとかセイバー、もしくは今のライダーならキャスターでもいけるか。
その3つならわかるけど…」

「そうですね。いい機会だから私の宝具も教えておくとしましょう。まず私がライダーのクラスになったのは私が倒したものとかかわりがあります。」

「ライダーが倒した?…確か森の守護者フンババと天の牛グアンナだっけ?」

「よくご存知ですね。そうその一方天の牛グアンナが関係します。私はグアンナを倒すとき鎖で律しグアンナの動きを抑えました。おそらくそれでしょう。その証拠に私は宝具として鎖の手綱を使いグアンナを使用することが出来ます。
それが【神を律する鎖綱】です。」

「なるほどな」

「これが私がライダーのクラスに現界した理由です。他の宝具についても説明しておきますと、
【王の獅子は友と共に】これは私の友ギルガメッシュが私に捧げた気高き幻想種の獅子王を召喚するものです。
乗ることも出来ますが、どちらかというと一体の使い魔として扱ったほうがよいでしょう。私はスキルの『言語理解』で獅子の言葉を

理解できますし。
次に【王から授けられし7つの宝】これは友ギルガメッシュが私に贈った七つの宝具になります。それぞれ槍、剣、斧と様々です。
最後に【戦神が与えし神の力】ですが、この宝具は私の力の元になっているニヌルタ神に与えられた力を解放するものです。
解放すれば、強大な力を手にしますが、狂戦士のように理性、知性を失います。私としてはあまり使いたくない宝具です。これで以上になります」

次々に明かされるライダーの宝具にウェイバーは唖然としていた。
【王から授けられし7つの宝】これは七つがひとつの宝具として成り立っているらしいが実質宝具は十個になる。
おそらく遠坂のアーチャーに次いで宝具の量が多い。流石は最古の大英雄といったところだろうか。
これを聞いたウェイバーの自信はさらに膨れ上がるものだった。

・・・・・・

次の日セイバーのサーヴァントとアイリスフィールが冬木にやって来ていた。
二人が冬木市に到着したのは、ほどなく夕焼けが西の空を染めようかという、午後も大分経ってからだった。

「凄い活気ねぇ……」

駅前パーク広場で乗ってきたハイヤーを降り、街の賑わいを見たところで、アイリスフィールは目を輝かせて感想を漏らした。
だがその隣に付き従うセイバーは、さながら戦場の地形を吟味する指揮官のように、醒めた眼差しで周囲を見渡している。

「すでに切嗣も、この地に辿り着いている手筈でしたね？」

「ええ。私たちより半日早い予定でね」

すでに入国の段階から、切嗣は自らの存在を秘匿するべく、アイリスフィールたちとは完全に別のルートを辿っていた。
彼はまず旅客便を乗り継いで新大阪国際空港に降り立ち、そこから鉄道で冬木市に到っている筈である。

「合流の算段はしなくても良いのですか？」

「大丈夫よ。彼の方から私たちを見つけてくれるはずだから」

セイバーは面にこそ出さなかったが、内心では、ろくな段取りもない切嗣とアイリスフィールの行動方針にいささか呆れ返っていた。

「では、今後の方針は？」

「そうね……当面は、状況の変化を見極めながら、柔軟に臨機応変に」

「つまり、何もすることがないと？」

「そういうこと」

憮然とするセイバーに、アイリスフィールは子供じみて見えるほど悪戯っぽい仕草で微笑する。

「でもそれじゃあ勿体ないわよね。折角こんな遠い国にまで来たんだし」

にこやかに周囲の雑踏を見渡すと、アイリスフィールは何の気負いを見せることもなく歩き出す。
隣のセイバーが慌てて付き従うほどに、その歩調は毅然として淀みない。

「ど――どこか敵のサーヴァントを見つける当てでも？」

「ううん。まさか」

あっけらかんと否定してから、アイリスフィールはくるりと振り向いて、請うような眼差しで連れを正視する。

「ねえセイバー。折角の機会なんだから、この街を見物しておきましょうよ。きっと面白いと思うわ」

「……」

予想だにしなかった申し出に、セイバーは一瞬だけ呆気に取られたが、すぐに表情を厳しく引き締めた。

「アイリスフィール。油断は禁物です。こうして冬木の土地に踏み込んだ以上は、もう敵地にいるものと覚悟してください。聖杯戦争は、もう始まっています」

「ええ。そこはセイバーが頼りよ。もし近くにサーヴァントがいれば、気配でそれと判るんでしょう？」

「それはまあ……そうですが」

霊体・実体を問わず、サーヴァントはサーヴァント同士で互いの気配を感じ取ることが出来る。
もちろん索敵能力には個人差があるし、中にはアサシンのような気配を消すスキルを持ち合わせた者もいる。

「私の場合、感知できるのはおおよそ半径二〇〇メートル程度が限界です。それも相手が何らかの能力を行使している場合に限ります」

「そう……でもそれなら、今この場で私たちを狙っているサーヴァントはいないのね？」

「はい。しかし――」

「じゃあ、こっちから誘い出すぐらいのつもりで行きましょう。どうせ探す当てなんてないんだし」

見えざる敵を探し求めて、敢えて挑発的に街中を闊歩するというのも、なるほどひとつの策ではあった。
大胆不敵な手段だが、これといって際立った探査能力を持ち合わせているわけでもないセイバーが、
積極的に敵を探そうとするならば、それしか他に方法はない。どのみち霊体化できない時点で、すでに彼女は隠密行動という選択肢を失っている。
だが筋の通った話と認めた上で、なおセイバーはアイリスフィール

の方針に不純なものを感じていた。
いやどう考えても、彼女はただ単に物見遊山をしたいがためだけに、セイバーを誘っているとしか思えない。

「アイリスフィール、やはりどこかに拠点を構えてから、切嗣も交えて、いったん方策を詰めるべきです。
この街の外れには、アインツベルンの用意した城があるのでしょう？」

「それはまぁ……そうだけれど」

今度はアイリスフィールが言葉を濁す番だった。
彼女とて、自分が危機感を欠いた軽率な行動をしようとしているという自覚はあるらしい。
何か事情があるのかと察して、セイバーは重ねてアイリスフィールに質す。

「この街を見て回るのに、どうしてそう拘るのですか？」

「私ね……初めてなの」

やや気後れした風に、アイリスフィールは傭き加減で答える。
セイバーは呆れ半分に溜息をついた。

「――知っての通り、私は聖杯に招かれるに及んで、この世界の知識を得ています。むろん戦場となるこの土地についても。アイリスフィール、ここはさほど大きな都市でも観光地でもありません。とりわけ見るような名所などないはずです」

「ううん、そうじゃないの。そうじゃなくて――」

アイリスフィールはまるで子供のように、説明になってない否定で頑なに拒んだ後、
しばらく逡巡してから、端的に白状した。

「私――外に出るのが初めてなの」

「……は？」

すぐには理解が及ばず、セイバーは呆然と聞き返す。

「だから、外の世界を出歩くのは、これが――生まれて初めてなの」

「では貴女は……これまでの生涯を、ずっとあの城で？」

きまり悪そうに俯いたまま、アイリスフィールは小さく頷く。

「私、この聖杯戦争のためだけに造られた人形だったから。外を出歩く必要なんてないって、そう大お爺様も仰有っていたわ」

セイバーとて、かつてのアルトリアとしての生涯が幸多いものだったわけではない。
だが、あの氷に閉ざされた城中に、生まれてからこのかた篭の鳥のように囚われ続けてきた人生などというものがあるのなら、さすがにそれには同情を禁じ得なかった。

「もちろん、何も知らないわけじゃないのよ？
特に切嗣が来てくれてからは。彼は映画とか、写真とか、外の世界の景色や出来事をいっぱい私に教えてくれた。
ニューヨークだとか、パリだとか、大勢の人が色々な暮らしをしている世界のことを。もちろんこの日本についてもね」

アイリスフィールは侘びしそうに笑い、それから辺りの雑踏を、さも愛おしげに見渡す。

「でも……この目で本当に世界を見るのは、これが初めて。だから嬉しくて、つい、はしゃぎ過ぎちゃったみたい。御免なさいね」

セイバーは静かに目を伏せて頷くと、ダークスーツに包まれた細い

肘を、そっとアイリスフィールに差し出した。

「……セイバー？」

「私とて、この街を歩くのは初めての経験ですが――それでもエスコートは騎士の役目です。及ばずながら努力します。さあ、どうか」

「――ありがとう」

朗らかな喜びに目を輝かして、アイリスフィールはセイバーの肘に腕を絡ませる。
夜までには、まだ大分時間があった。

・・・・・・・・・

夜ライダーとウェイバーは夜の冬木の街を歩いていた。
ライダーの服装はふんわりしたシルエットのひざ丈より少し下のワンピースに少し厚めのコート代わりの白色のカーディガン。つまり現代の服装である。
ライダーがあるけば、周りの人が男女問わず彼女に目がいっていた。
今日は、冬木の地形確認とライダーのショッピング。
ライダーはどちらかというと女性の姿が気に入っているのか、ほぼ女性の格好をしている。
戦争をしているというのに、危機感がなく、現代に溶け込んでいっ

ている己のサーヴァントを見てウェイバーはため息をついた。
するとライダーが歩きながら話しかけてきた。

「マスター」

「…なんだよ。言っとくけどお前の服はもう買わないからなっ」

ライダーの今着ている服はウェイバーが買ったものだ。
ただ、女性ものはお金があんなにもかかると思っても見なかったので、これ以上買うつもりはない。
ライダーの表情は今までショッピングモールなどを歩いていたときと違い真剣であった。

「…これ以上買ってもらうわけにはいけません。そうではなくマスター。実は先ほど、気配を隠さないサーヴァントがうろついていました。」

「えっ…」

そんなこと今さらだ。サーヴァントがうろついていたのに、夜の街を歩いていた。
間違いがあれば、死んでいたかもしれない。
自身のサーヴァントが情報を隠していたことにウェイバーは怒る。

「おいっなんで今言ったんだよ！っ」

「ごめんなさい。向こうがこちらに気付いてるわけでもなかったので余計な心配をかけるべきでないと判断していました…」

ライダーは自分のことを思って言わなかった事を知って、怒ったのは悪かったなとウェイバーは思った。

「うっ…ま、まぁ、それなら許してやる…で、……言ってきたってことはそのサーヴァントに動きがあったのか？」

「はい。そのサーヴァントに他のサーヴァントが近づいているようです。…私たちはどう動きますか？」

「……」

ウェイバーは考える。
ここで出て行くか出て行かないか。
サーヴァントが三体も集まれば乱戦になる。
そうすれば、他の参加者より弱いウェイバーたちが不利になる。
しかし、よく考えてみれば二人のサーヴァントが潰しあい、
どちらかが負けて、勝ったほうが弱った所をたたけば、かなり御得ではないか。

そうだそうしよう。

「ライダー。ボクたちはサーヴァント同士が潰しあったのを見て、勝ち残ったほうをつぶ…！？」

ウェイバーが喋っていたとき、第三者に睨まれた感覚を覚え、後ろを見た。
あれから歩いていたので今ここは街から少し離れた公園だ。そこはもう夜でいくつかの街灯の光が辺りを照らしているだけの空間。
後方を見たがなにもいなかった。
気のせいかと思ったが、未だに見られている。
後ろではない。この視線は前からだ。
ウェイバーは後ろに向けていた視線を恐る恐る前に戻す。
すると前方には、金色に輝く鎧を身に付け、金色の髪をした男が真っ赤な目でウェイバーとライダーのほうを見ていた。
ウェイバーにはその男に見覚えがあった。
…そう。遠坂邸でアサシンのサーヴァントを多くの宝具で圧倒した者。
遠坂のサーヴァントだ。
サーヴァントはゆっくりとこちらに近づいてくる。
まずい！！そうウェイバーは思った。
サーヴァント同士が会うということは、サーヴァント同士の戦いが始まることを意味している。
ライダーを信じていないわけではないが、この最古の英雄王ギルガメッシュとの戦いにおいてライダーがウェイバーを守りながら戦えるのだろうか。
答えは否だ。伝承ではライダーとギルガメッシュの力は拮抗していた。

しかし、今は違う。ウェイバーに呼び出されたライダーと、遠坂という名家に呼ばれたギルガメッシュとでは差があるのだ。
それでもライダーは善戦してくれるだろう。
能力では負けていても勝負に負けることはないと思う。しかし、聖杯戦争はマスターが負けても負けだ。
サーヴァントとマスター。
マスター同士の戦いだって考えられる。
そうなれば、ウェイバーは勝てるわけがない。…

ここで会うなんて最悪だ

ウェイバーは一人焦っていた。そう一人だ。
もう片方のライダーは焦ってはいなかった。
ライダーの顔は本当に幸せそうな表情だった。
二度と会えないと思っていた人に会えたのだから、それはそうだろう。
それが”人間”なのだから。

「やはりきていたか……久しいな。エルキドゥよ」

ギルガメッシュはライダーとウェイバーの近くまで来ると、立ち止まりライダーに話しかけた。

「…本当に久しぶりですね。…ギルガメッシュ」

二人は昔を思い出し、懐かしさがこみ上げてきていた。

ライダーと挨拶を交わしたギルガメッシュはウェイバーを睨む。
ウェイバーは恐怖に身を震わせる。

「…しかしせっかくの再会の場に雑種がいようとは…
それにこの雑種が我の友のマスターと考えると……我としては非常に不愉快だ」

ウェイバーはまずい！！と本能的に感じた。
こいつは自分をよく思っていない。
もしかしたら殺させるかもしれない。

「ギルガメッシュ。ウェイバーを侮辱するのは許しません」

ライダーがギルガメッシュを睨む。
ライダーがウェイバーのことを侮辱したギルガメッシュを怒ってくれたのはとても嬉しかった。
ギルガメッシュはというとライダーに睨まれて、少し反省したのか

「す、すまん。そうだな。友を呼び出したのだ。雑種なりに誇ってもいいぞ雑種」

「ギルガメッシュ？」

「…うっ…この我が下等な雑種ごときを認めろと？」

なんとも悔しそうにライダーを見つめるが、ライダーは相変わらずギルガメッシュを睨んでいる。

「…くっ…誇りに思え。…小僧」

ギルガメッシュがウェイバーを雑種呼ばわりから小僧と変えたのに、ライダーは満足したのかうんうんと笑みを浮かべて頷いている。もしかして、ギルガメッシュはライダーに頭が上がらないのだろうか。

今までの威圧感、恐怖が嘘のように消え去っているのをウェイバーは感じた。

「ところで、ギルガメッシュ。私とあなたがこう会ったわけですけど…戦いますか？」

「…ふんっ。我とお前が戦う場所はそれ相応の場所だ。このような場所ではない。」

「でも、あなたのマスターはそれを許すんですか？」

「あれは我に臣下の礼を取っている。我に逆らうようなことはしな

い」

それを聞いてウェイバーは安心した。
しかし、マスターが臣下の礼を取るなど主従関係が逆転してるきがする。

「それを聞いて私もマスターも安心しました。……ところであなたはこんなところでなにをしているのですか？」

「どうやら、自身の立場を分からない雑種がうろついていたようでな。
目障りだ。この我自ら成敗してくれようと思ったのだが、
その雑種と他の雑種が戦うのを見てみるのも一興と考えたのだ。
…途中で懐かしい気配を感じ取った。そしてここにいる。
どうだエルキドゥと小僧。お前たちも来るか？」

「…これでもアミュレットで魔力を隠していたのですが」

「ふんっお前の気配を我が間違えるわけがなかろう。」

「それも、そうですね…マスターどうしましょうか？」

そこでボクに聞くか！？とウェイバーは内心焦った。

ギルガメッシュが自分を見て、行きます。と言えと睨んでいる。
どっちにしても行く予定だったし。

「…行こう。」

渋々ウェイバーは答えた。

「中々に賢い答えだ…ところでエルキドゥが着ている服はお前が買ったのか？」

ギルガメッシュが小さな声で聞いてきた。
なんだかエルキドゥ絡みになると王としての威圧感みたいなものが一気になくなるギルガメッシュである。
ウェイバーはそれにうん。頷く。

「ちっ…エルキドゥに贈り物とは…貴様まさかエルキドゥに惚れているんではあるまいな？」

「…！？そ、そんなわけないだろうが！！ライダーはボクのサーヴァントなんだぞぉ！？」

ウェイバーはついつい大声を出してしまった。
ウェイバーが近くで大声をあげたのでギルガメッシュは耳を塞いだ。

「我の耳に雑音を入れるな！！……まぁ、それならよい。
エルキドゥに見合う者は我が決めるからな」

ギルガメッシュはエルキドゥの親なのだろうか。
父親のような感じだ。
ウェイバーと話し終えるとギルガメッシュはエルキドゥに話しかけた。

「エルキドゥ。欲しい物があれば言え、我が何でもやろう」

「ふふっありがとうございます。」

「当然のことだからな。それにしてもこの現の服も似合っている。
服もお前に着てもらい嬉しかろう」

「よかったです。これはウェイバーが選んでくれたんです」

エルキドゥがそう言うとギルガメッシュはウェイバーのほうに顔を向けた。
ウェイバーは一瞬身構えたが、ギルガメッシュはウェイバーを見て、よくやった。とでも言いたげな顔で頷いてからエルキドゥのほうに視線を戻したのだった。

.
.
.
.
.
.
.
.
.

ＡＣＴ０４（後書き）

ようやく投稿できました。
ギルガメッシュとの絡みを増やす方向で考え直していたら時間が随分立っていました。我様が随分とキャラ崩壊起していますが、これはこんな感じでいこうかなと思いますので、ご理解ください（笑）

実は最近事故したりと日常が大変で、投稿が中々出来ません。
宝具の詳細などはすぐに投稿します。お待ちください。

設定１（前書き）

大晦日ですね。
本当は今年にもう一話更新したい。
あとがきにお願いがあります。

それとこの設定ですが、自分のメモから引用したので、見にくいかもしれませんが、ご了承ください。

設定1

【クラス】ライダー
【マスター】ウェイバー・ベルベット
【真名】エルキドゥ
【性別】不明・男
【身長・体重】１６７ｃｍ　５４ｋｇ
【属性】混沌・善

【筋力】　Ｂ　【魔力】　Ｂ
【耐久】　Ｃ　【幸運】　Ｄ
【敏捷】　Ａ　【宝具】　Ａ

【クラス別能力】

対魔力：Ｂ
魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。
大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい。

騎乗：Ａ－
騎乗の才能。
獣であるならば幻獣・神獣まで乗りこなせる。
ただし、竜種は該当しない。

【保有スキル】

気配感知：Ａ＋
敵の気配を感知する野生の感覚。
周囲の生命体の位置、ある程度の状態、水源の位置を知ることが出

来る。
範囲はＡ＋となると数ｋｍの感知は可能。
気配遮断で存在を隠匿していても判定次第で見破る事が出来る。

勇猛：Ａ
威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。
また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

単独行動：Ａ＋
マスター不在でも行動できる能力。

怪力：Ｂ
一時的に筋力を増幅させる。魔物、魔獣のみが持つ攻撃特性。
使用する事で筋力をワンランク向上させる。持続時間は”怪力”のランクによる。

言語理解：Ｂ
動物の言葉を理解することができる

神性：Ｃ
神霊適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神霊との混血とされる。
神に嫌われたためと巫女シャムハトと交わったためで適正は落ちている。

【クラス】ライダー
【マスター】ウェイバー・ベルベット
【真名】エルキドゥ
【性別】不明・女

【身長・体重】１６３ｃｍ　５１ｋｇ　Ｂ７５／Ｗ５４／Ｈ７８
【属性】混沌・善

【筋力】　Ｃ　【魔力】　Ａ
【耐久】　Ｃ　【幸運】　Ｃ＋
【敏捷】　Ｂ＋　【宝具】　Ａ

【クラス別能力】

対魔力：Ａ
Ａ以下の魔力はすべてキャンセル事実上現代の魔術師ではライダーに傷をつけることはできない

騎乗：Ａ-
騎乗の才能。
獣であるならば幻獣・神獣まで乗りこなせる。
ただし、竜種は該当しない。

【保有スキル】

気配感知：Ａ＋
敵の気配を感知する野生の感覚。
周囲の生命体の位置、ある程度の状態、水源の位置を知ることが出来る。
範囲はＡ＋となると数ｋｍの感知は可能。
気配遮断で存在を隠匿していても判定次第で見破る事が出来る。

勇猛：Ａ

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。

単独行動：Ａ＋
マスター不在でも行動できる能力。

言語理解：Ｂ
動物の言葉を理解することができる

神性：Ｃ
神霊適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神霊との混血とされる。
女神の泥、戦神の力から適正は高いはずだが、神に嫌われたため落ちている。

夢告：Ｂ
直感、啓示と同じようなスキル。
指定した者の夢の神からの夢告を読み取る。
夢告はその者の未来に関することだが、神に嫌われたため詳細には分からない。
伝承でギルガメッシュのために設えた床がスキルになっている。

☆補足

ライダーになったのは天の牛を倒したとき、天の牛に乗り、頭、角の間に剣を突き刺したことから。
天の鎖で律したという設定に。宝具にも反映させている。
パラメータはウェイバーちゃんだったからギルガメッシュより低め、でも宝具やらスキルでカバー。

女性になれば魔術が使えます。厳密には魔法、魔術とはまた異なったもの。
神から命を授かった時に付属した力なので、不明。
枠組み的に言うなら魔術に近いものがある。
大魔術並みのものであっても三小節程度で起動させられる。

女性のスリーサイズは……スルーして頂いて結構です。（笑）

【宝具】

【女神が与えし泥の肉体】

ランク：一
種別：対人宝具
レンジ：一
最大捕捉：一

宝具は女神アルルが作ったエルキドゥの泥そのもの。
肉体を形成するために必要な宝具。
泥はエルキドゥが思う物体に形態を変えることができる。
ただし、泥は肉体を作っているものに限るので、質量の大きなものは不可。

【戦神が与えし神の力】

ランク：一
種別：対人宝具
レンジ：一

最大捕捉：一

【女神が与えし泥の肉体】以外の宝具をすべて封印することで解放できる。
エルキドゥの力の元となる戦神ニヌルタが与えた力。
筋力、耐久、敏捷のパラメーターが2ランクあがる。
穏やかな精神、人という知性、理性を捨て、戦闘に特化する。
そのため、この宝具を使っている間は非常に好戦的になる。
この宝具を使っている間は伝承初期のエルキドゥに戻るため、野生としての本領を発揮する。
己の肉体が宝具なので、宝具とも渡り合う。
短時間ならば、自分で律することで、宝具の使用を止められるが、長時間の使用はエルキドゥの理性と知性を完全になくしてしまう。
ぶっちゃけバーサーカーになる。

【神を律する鎖綱】

ランク：B
種別：対神、騎乗宝具
レンジ：1～20
最大補足：10人

エルキドゥの神に反するという意思が象徴された神を律する鎖。
鎖は使用者の意思に反応して相手を拘束する。
数少ない「対神宝具」のひとつで、相手の神性が高い相手ほど制約・拘束力が高まる。
しかし、いくら縛り上げたところで相手を無力化できるわけではない。ちなみに神性を持たないものにとっては少々頑丈な鎖。
鎖を分割して展開すれば最大で10人。だが拘束力は落ちる。

召喚した天牛（グアンナ）の、手綱として使用できる。

【王の獅子は友と共に】

ランク：B
種別：対人、騎乗宝具

生前エルキドゥとギルガメッシュのそばにいた獅子。
ギルガメッシュは獅子が死んだ後、獅子の亡骸をエルキドゥに捧げた。
召喚される獅子はエルキドゥを主と認め最も強いとされる幻想種のその力、速さを発揮する。

【王から授けられし7つの宝】

ランク：C～A＋＋
種別：対人宝具
レンジ：－
最大補足：－

ギルガメシュが、エルキドゥのために飾った7つの財宝。
エルキドゥが呪いで寝込んだ際にエルキドゥのためにウルクの七つの城門にそれぞれ飾られた。
【太陽神と約束せし十三の風】、【煌く炎の剣】、【世界終わらす獄炎の剣】、
【清らかに輝く黄金の剣】、【万物を射る無窮の弓】、【無銘・太刀】、【無銘・大斧】からなる。
宝具七つがひとつの宝具としての認識のため、同時に使用すること

は出来ない。

【王から授けられし７つの宝】の宝具

【太陽神と約束せし十三の風】（シャマシュ）

ランク；Ａ＋
種別：対軍宝具
レンジ：１～５０
最大捕捉：１００人

太陽神シャマシュの力が宿った太陽のように光り輝く聖槍。
かつてフンババを倒す際に借りた太陽神シャマシュの力が内包されている。
１３種の風、南北東西の風、うめきの風、一陣の強風、悪風、熱風、災の風、凍てつく風、怒濤の風、つむじ風を槍にそれぞれ纏うことが出来る。
真名解放すれば槍本体から放たれる１３種の風が一気に襲い掛かる。
喰らったものは視界を奪われ、動きを奪われ、その場にひれ伏す。
避けることはほぼ不可能である。

【煌く炎の剣】（リットゥ）

ランク：Ａ＋＋
種別：対界、結界宝具
レンジ：１～９９
最大捕捉：１０００人

バビロニアの神、マルドゥクの持つ炎の剣。「神造兵器」の一つ。
智天使ケルビムとともにエデンを守るために置かれた。
旧訳聖書の創世記に記述のある剣の炎であるラハット・ハヘレヴ・ハミトゥハペヘットも『煌く炎の剣』でありこれが派生品と思われる。
刀身から常に炎が噴出しており、炎を消すことは出来ない。
刀身の刃によって相手を斬るのではなく、刀身に纏われている炎を操って相手を斬ることも出来るが
どちらかというと守護用の宝具で剣の周りに回転している炎の円が、使用者を守護する。

【世界終わらす獄炎の剣（レーヴァテイン）】

ランク：Ａ＋＋
種別：対界宝具
レンジ：１～９９
最大捕捉：１０００人

北欧神話の原典資料においては、世界樹の頂に座している雄鶏ヴィゾーヴニルを殺すことができる剣でありスルトがラグナロクの時にふるう炎の剣。
灼熱の炎の渦を発生させ周囲の空間をなぎ払うかつてケルト神話において神々の世界を炎で焼き尽くしたエアと並ぶ「”世界を終わらせた”剣」
杖の形をしており、魔力を開放することで剣の形になる。刀身は獄炎の色で、柄などは他の場所は黒く染まっている。
本来ならば、剣、槍、杖、枝という様々な形状になるのだが、本来の持ち手ではないので原典として存在していた杖、剣という形状で

しか使用できない。
解放すれば燃え盛る炎の剣になる。
振るうと使用者の意思に沿い、周囲一体を焦土と化す威力を持つ。

【輝く黄金の聖剣（オートクレール）】

ランク：C
種別：対人宝具
レンジ：—
最大捕捉：—

カール大帝の家臣で十二勇将のひとりであるオリヴィエ（オリヴェ）卿が持つ『高潔なる黄金の聖剣』の原典。
刀身からすべてが黄金である。使用者が『邪悪』と思った対象物に対して非常に強力な力を発揮する。
光の刃を放ち邪悪なものを浄化する。
「鍔金は金、柄は水晶にて飾れるもの。」（ローランの歌）。

【万物を射る無窮の弓】

ランク：B
種別：対人宝具

弓の宝具の原典。銀色の輝きを放ち続ける大きく美しい弓。
矢はもちろん剣、槍、水、風、音、有形・無形に関わらずあらゆる物を矢として扱える万能の弓。

速さ、命中精度、射程距離も申し分ない。
派生品として『アーサー王伝説』に登場する円卓の騎士トリスタンの持つ『無駄なしの弓』、
ギリシャ神話のアルテミスの持つ弓などが挙げられる。
『無駄なしの弓』は竪琴のような形をした百発百中の弓。
アルテミスの弓は使用者の意志に反応して相手を自動追尾する必中の弓。

【無銘・太刀】

大きく反った片刃の剣。
生前エルキドゥが使い、フンババを殺した剣。
薬草が塗られていて、使用者が悪意を向けない相手の傷を治すことが出来る。
天の牛（グアンナ）を屠った剣でもあり、神性の高いものに対して威力が増す。

【無銘・大斧】

生前ギルガメッシュが使い森の番人フンババを殺し、森を広く伐採した斧。
環境破壊の象徴といわれる。
薬草が塗られていて、使用者が悪意を向けない相手の傷を治すことが出来る。
自然物に関するものに対して威力が増す

由来

真名をエルキドゥ（エンキドゥ）。
ギルガメッシュの唯一無二の友であり、自らも強大な力を持つ。
簡素な服装に、男とも女とも取れる柔和な風貌で、その精緻さは人間というより人形に近い。
淡い緑色の長髪をした、中性的な美少年または美少女。
もとは神に生み出された泥人形であり、人智を超えた力を持ちながらも知性も性別も無く、
ただ森の獣たちと戯れる生活をしていた。だが聖娼と名高い女と六日七晩過ごすことで人間の姿と知性を手に入れた。
獣との生活で『獣の言葉』を理解でき、意思疎通ができる。
最高クラスの『気配感知』スキルを持ち、遠く離れた場所の水源やサーヴァントの気配を感知できる。
驚くべきはスキル、宝具の多さ。

宝具は色々考えました。
元々は【無銘・太刀】【無銘・大斧】
【女神が与えし泥の肉体】【戦神が与えし神の力】【神を律する鎖綱】だけだったのです。
【神を律する鎖綱】に関しましては【天の鎖】のままでもよかったのですが、ギルガメシュと同じなら一工夫入れたかったからです。
それで他の宝具なのですがよくよく考えたらランサーとして呼ばれたんだから槍系あってもいいんでは？と思い、
考えた末に出来たのが【太陽神と約束せし十三の風（シャマシュ）】ですね。
かなり無理やり感がある宝具ですよね（笑）
ここまできて宝具の量が多い…武器とかどうにか纏めたくなり、ならギルガメッシュから貰ったので一くくりにしてしまえと思いまして、

【王から授けられし7つの宝】になりました。7つの元ネタですが、ウルクの城門は7つあったそうです。
このSSでのオリジナル設定で7つの城門にエルキドゥの呪いが解けるように7つの財宝を飾ったということにしました。
そして7つ考えることになったのですが、【無銘・太刀】【無銘・大斧】【太陽神と約束せし十三の風】(シャマシュ)一緒にして残り4つどうしようと考えた結果最初に考え付いたのが【輝く黄金の聖剣】(オートクレール)になります。
ギルガメッシュがデュランダルもってるなら同じようなので奇麗なもの…と考えて同じくカール大帝の十二勇将から使わせてもらいました。
次が【煌く炎の剣】(リットゥ)になります。バビロニア関係から使いたかったのと、神に関係させたかったところがあります。
それと同じく【世界終わらす獄炎の剣】(レーヴァテイン)。これは時代背景がずれてしまうのですが、グラムとかギルガメッシュが持ってるなら、神に関係して持たそうと思いました。
最後に【万物を射る無窮の弓】ですが、これは自分が持たせたかっただけです。
美しい宝具と考えてフェイルノートを思いつきました。ならこれの原典にしようと思ったのですが、
フェイルノートはトリスタンが作ったらしいので原典は……なら、すべての原典とかにしちゃおうってなりました。
【王の獅子は友と共に】なのですが、ギルガメッシュの側にいたことに関わりを持ち、
お互いにギルガメッシュを理解できた存在ということで惹かれあい宝具になったという設定です。

さてこれで宝具の説明は全部になるのですが、……宝具が強すぎる／（＾Ｏ＾）／

一応真名解放可能って設定なのですが
正直【世界終わらす獄炎の剣(レーヴァテイン)】【煌く炎の剣(リットゥ)】はＥＸ宝具でもいいわけで、
【万物を射る無窮の弓】なんてただのチート宝具だし……
実際全部の宝具使うことないだろうし。（笑）
というかいらない宝具ありすぎって言われても仕方ない。
宝具のことで一ヶ月悩みました。
結局チートなってしまったわけですが、本当言うとチートにはしたくなかったんです。
ある程度最強にはしたかったのですが、ここまでなるとは思いませんでした。

☆その他メモ

バーサーカーで呼ばれてた場合を考えてみた。
というか最初はバーサーカーで呼ぶ予定でした。
私は桜が好きなので助けたかったのです。
さて、ならどうやって助けるか。
バーサーカーなら無理……ではなく、エルキドゥは基本優しい心の持ち主なのです。
バーサーカーで呼ばれたが、雁夜おじさんの優しさに触れ、次第に知性を取り戻していくという物語でいく予定でした。
しかし、それだと何スロットさんの絡みがなくなるのでやめました。
ランサーにしようかなーって思ったんですが、ウェイバーとの相性のほうがよさそうということでライダーになりました。

【クラス】バーサーカー
【マスター】
【真名】エルキドゥ
【性別】不明
【身長・体重】１６７ｃｍ　５４ｋｇ
【属性】混沌・善

【筋力】　Ａ＋　【魔力】　Ａ
【耐久】　Ａ＋　【幸運】　Ａ＋
【敏捷】　Ａ＋　【宝具】　－

【クラス別能力】

狂化：Ａ＋
全パラメーターを2ランクアップさせる。
マスターの制御さえ不可能。

【保有スキル】

対魔力：Ａ
Ａ以下の魔力はすべてキャンセル事実上現代の魔術師ではバーサーカーに傷をつけることはできない

気配感知：Ａ＋
敵の気配を感知する野生の感覚。
周囲の生命体の位置、ある程度の状態、水源の位置を知ることが出来る。
範囲はＡ＋となると数ｋｍの感知は可能。
気配遮断で存在を隠匿していても判定次第で見破る事が出来る。

勇猛：Ａ
威圧・混乱・幻惑といった精神干渉を無効化する能力。
また、格闘ダメージを向上させる効果もある。

単独行動：Ａ＋
マスター不在でも行動できる能力。

怪力：Ａ
一時的に筋力を増幅させる。魔物、魔獣のみが持つ攻撃特性。
使用する事で筋力をワンランク向上させる。持続時間は”怪力”のランクによる。

言語理解：Ａ＋
動物の言葉を理解することができる
言語能力を失っているため意味はない。

神性：Ａ
神霊適性を持つかどうか。高いほどより物質的な神霊との混血とされる。
伝承初期のため、女神の泥と戦神の力の加護が常に働いている。

【宝具】

【女神が与えし泥の肉体】

常時解放宝具。
泥があり続ける限り、死ぬことはない。
己の身体自身が宝具となっている。

【戦神が与えし神の力】

常時解放宝具。
筋力、耐久のパラメータを2ランク上げる。
己の身体自身が宝具となっている。

【無銘・太刀】

大きく反った片刃の剣。
生前エルキドゥが使い、フンババを殺した剣。
薬草が塗られていて、使用者が悪意を向けない相手の傷を治すことが出来る。
天の牛を屠(グアンナ)った剣でもあり、神性の高いものに対して威力が増す。

ただのチート（笑）

次にライダーのクラスで有能な魔術師に召喚された場合。

【クラス】ライダー
【マスター】ウェイバー・ベルベット
【真名】エルキドゥ
【性別】不明・男
【身長・体重】１６７ｃｍ　５４ｋｇ
【属性】混沌・善

【筋力】　Ｂ＋　【魔力】　Ｂ
【耐久】　Ｂ　【幸運】　Ｂ
【敏捷】　Ａ＋　【宝具】　－

スキルは変わらない。

エルキドゥの触媒。

原作では触媒（聖遺物）が無ければ、召喚者と似た者が呼ばれるとあります。
触媒に関しましてはいくつかの要因があります。というか考えたものを載せます。

・ギルガメッシュに引き寄せられた。
・鶏の血で書いた魔法陣にウェイバーの血が混ざったことで、野生から人へとなったという伝承と関わりを持った。

☆没宝具

【古都で始りし友との絆】

ランク：ＥＸ
種別：結界宝具
レンジ：―
最大補足：―

固有結界？
結界内は心象風景としてギルガメッシュとのウルクでの決闘の場を

再現する。
ギルガメッシュがサーヴァントとして召喚される。
ギルガメッシュはエルキドゥの記憶のものであり、その結界内のみ存在出来る。

第四次のライダー、つまりイスカンダルと同じようにしたかったから。
最初に考えた宝具その１

【探求の果てに手に入れし宝】

ランク：Ｅ～Ａ＋＋
種別：対人宝具
レンジ：－
最大補足：－

英雄王ギルガメッシュが生前集めた宝を使用できる。
生前集めた宝はすべて原典である。
ギルガメッシュの『王の財宝』と違いバビロニアの宝物庫にはつながらず、
己が覚えている原典のみを使用できるため、
使える数もギルガメッシュと比べ圧倒的に少ない。

英雄王から財を貰っていてもおかしくないはず。
旅で一緒に手に入れたやつとかもありそうだし。
【王の財宝】に対抗するために最初に考えていた宝具その２。
その１との併用はなしの方向で考えていた。

設定１（後書き）

お願い。

宝具に関しまして

【女神が与えし泥の肉体】
【戦神が与えし神の力】
【神を律する鎖の手綱】
【王の獅子は友と共に】
【王から捧げられし７つの宝】
【万物を射る無窮の弓】

の宝具のかながないので是非案をください。お願いします。
想像力の貧相な自分には思いつかなかったので。

それと宝具に関してはこれから変更するかもしれません。
いらない宝具の削除とかするかもしれません。
その時は報告しますのでよろしくお願いします。
それにしても練習用の作品で投稿したのに何時の間にかお気に入り件数６００でびっくりしました。
来年も頑張っていくのでどうぞ暖かい目で見守ってください。
では皆様良いお年を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0405z/

Fate/Holy Grail War of Enkido

2011年12月31日00時56分発行